

目白研心中学校・高等学校における 海外姉妹校交流プログラム

—オグルビーハイスクールとの交流行事を通して—

Overseas Sister School Exchanges at Mejiro Kenshin Junior & Senior High School

—International Exchange Program with Ogilvie High School—

森本 治子

(Haruko MORIMOTO)

I. はじめに

目白研心中学校・高等学校では、教育ビジョンのひとつとして、「グローバルに活躍するための国際教育の推進」を掲げている^{註1)}。国際性を身につけるためには、異文化理解、実践的英語力の向上、豊かな自己表現力とコミュニケーション力の育成が求められている。私たち一人ひとりによる異文化間のコミュニケーションの体験が、ますます国際化する日本社会においても重要になってきている。

目白研心中学校・高等学校とオーストラリア、タスマニア州にあるオグルビー高校との姉妹校交流は1995年より始まり、交換留学を継続して実施している。今年度までに、オグルビー高校からは31名の留学生を受け入れ、目白からは30名の生徒を派遣している。クラブの交流として、1997年にはオグルビー高校から合唱団が来日し、目白学園からも1998年にチアリーダー部、2000年に吹奏楽部が訪問している。昨年9月には、佐藤弘毅理事長が目白研心中学校・高等学校の国際交流の推進と目白大学との「日本語教育インターンシップ制度」について協議をするためにオグルビー高校を訪問した。目白大学より若井千草専任講師、長島リンドー国際交流コーディネーター、目白研心より筆者が同行し、ジュデイス・ティムズ校長と両校の交流について話し合った。

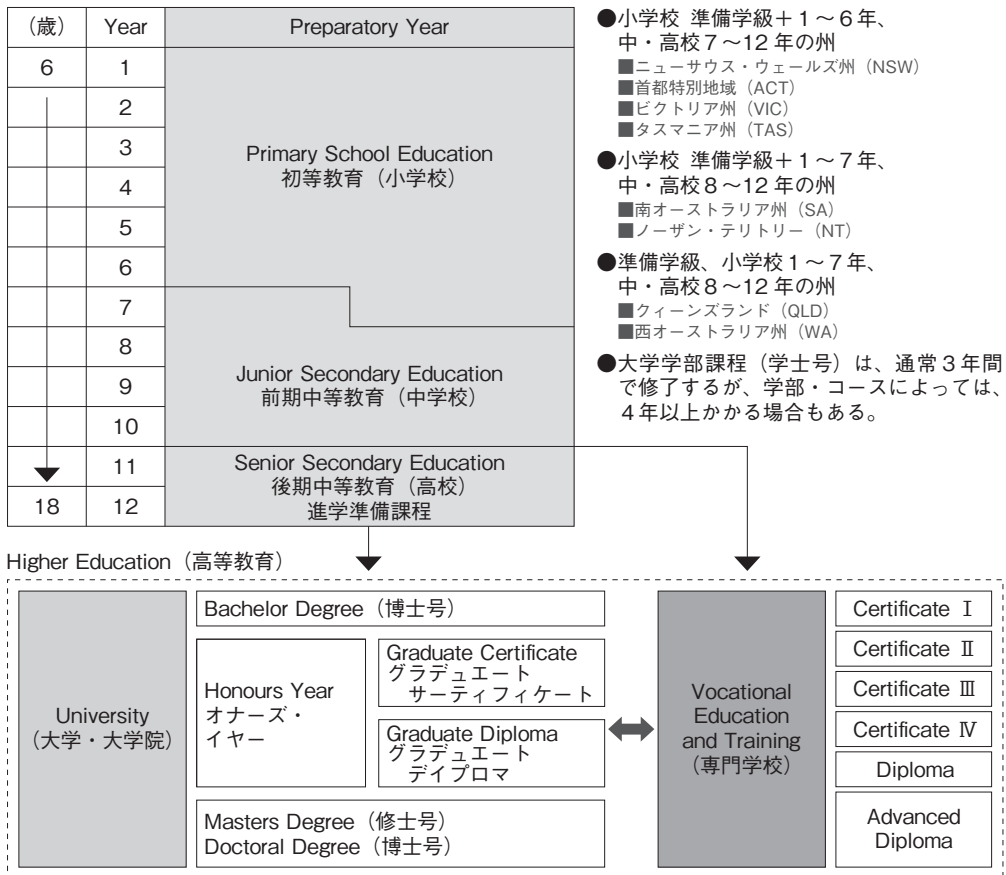
この訪問がきっかけとなり、今年度の目白研心中学校・高等学校の入学式にオグルビー高校よりティムズ校長をはじめとする3名の来賓が出席し、ティムズ校長から新入生に向けて祝辞を頂戴した。また同時期には、日本へ語学研修の一環として来日したオグルビー高校の教員3名と生徒25名を目白研心で受け入れ、ホームステイや交流行事を実施した。オグルビー高校の語学研修参加生徒は、希望者の選抜と経費の調整のため、2年間の準備期間を経て来校した。本稿は、中学校・高等学校における国際教育の推進を目指した海外姉妹校との交流プログラムについての実践的研究報告である。今年度の取り組みと評価、今後の課題について述べる。実施内容や生徒へのアンケート結果における検討を加えた。

Ⅱ. オーストラリアの中等教育

(1) 概要

日本では、文部科学省が教育制度を管轄しているが、オーストラリアでは、各州に教育を担当する行政部がある。それぞれの州で、独自の学校教育制度・政策を展開し、初等・中等教育までの教育制度は州によって異なる。義務教育期間は6歳から15歳であるが、タスマニア州では16歳である。学校教育制度は、就学前教育、初等教育、中等教育で構成されており、中等教育は前期と後期に分かれている。中等教育前期（10年生まで）が義務教育期間であり、後期中等教育（11・12年生）は中等教育修了資格を取得するための準備段階となっている。高等教育（大学または専門学校）への進学には、中等教育修了が条件となっている。

オーストラリアでは、1970年代に入り、国民の多様な言語的文化的背景に配慮した教育が、多文化教育の一環として試みられるようになった。言語教育の領域では、「第二言語としての英



出典：オーストラリア政府教育情報センター

語教育」(「ESL」—English as a Second Language)が拡充され、学校において「コミュニティ言語教育」が行われるようになった。「コミュニティ言語教育」とは、オーストラリアの地域社会、エスニックコミュニティで実際に日常的に使用されている言葉(イタリア語、ギリシャ語、中国語、ベトナム語など)を母語とする子どもたちの母語保持のために、母語としない子どもたちにも文化間の相互理解のために教えようというものである。その後「コミュニティ言語教育」は、各州のカリキュラムに「英語以外の言語学習」(「LOTE」—Languages other than English)として正規に位置づけられるようになり、初等学校においては選択で、中等学校においては必修として実施されるようになった。「LOTE教育」は「コミュニティ言語教育」の概念を広げ、オーストラリアにとって地理的経済的に重要な言語(日本語やインドネシア語など)、外国語として教えられてきた言語(ドイツ語やフランス語など)が含まれるようになっている。学校での「LOTE教育」の実施、またどの言語で行うかの判断は、原則として各学校の判断に任されている。中等学校では複数の言語を教える学校もあり、生徒はそこから選択できるようになっている。

(2) 日本の学校との交流について

オーストラリア政府は1976年に豪日国際交流基金を設立した。それ以来、オーストラリアと日本は活発な文化交流を行っている。オーストラリアの高等学校は、公立・私立を問わず国際交流に積極的である。これには、オーストラリア連邦政府の教育省が、外国の生徒の受け入れを奨励しているといった背景がある。

目白研心中学校・高等学校は、オグルビー高校のほか、ブリスベン市のサマビル・ハウス、アデレード市のセント・アロイシャス・カレッジと姉妹校交流を続けている。またセント・アロイシャス・カレッジでは、中学3年から高校2年までの希望者を対象に1995年より春期オーストラリア語学研修を実施している。ホームステイをしながら、10日間の英語研修、校外学習や交流行事を通して、異文化交流の貴重な体験を重ね、英語学習に対する意欲を高めることを目指している。

日本とオーストラリアとの国際交流は、経済面及び観光面での関係の深まりを背景に、1970年代後半から次第に増加し、90年代に急速に拡大した。文部科学省による「高等学校等における国際交流の状況について」で把握された2008年度のオーストラリアにおける姉妹校の数は436校(全体の25.7%)、修学旅行でオーストラリアを訪れた生徒の参加者数は215校で29,662人(全体の16.5%)、語学研修で生徒をオーストラリアの学校に派遣した生徒数は599校、8,867人(全体の27.4%)で、国別では最も多い。姉妹校提携を結んでいる学校は延べ1,695校で、2006年度の前回調査より1.0%増加し、オーストラリアの姉妹校の数は22校(5.3%)増えている^{註2)}。同調査は、1986年度から国内すべての国公立校を対象に実施しており、2008年度で12回目となる。日本とオーストラリアの間では、全般的に活発な教育交流が続いており、交流活動の内容もより多様になっている。

日本の生徒がオーストラリアに短期滞在するプログラムでは、ホームステイをしながら、現地の学校の授業に参加する。そのほか、日本語を学ぶ現地の生徒たちと市内を見学したり、農場を訪れたり、小学校で日本文化を紹介したりする。オーストラリアの生徒を日本に受け入れるプログラムの場合、現地の学校の夏休みにあたる12月から1月にかけて日本を訪れ、ホームステイをしながら日本の文化を学ぶことが多い。留学という目的だけではなく、スポーツや音楽、演劇クラブの海外交流・研修などで日本を訪問し、数日から数週間滞在することもある。オーストラリアの学校では、日本語を学ぶ生徒も多く、日本への関心も高いので、今後も幅広い分野にわたり交流が続くことが予想される。

(3) オグルビー高校の教育について

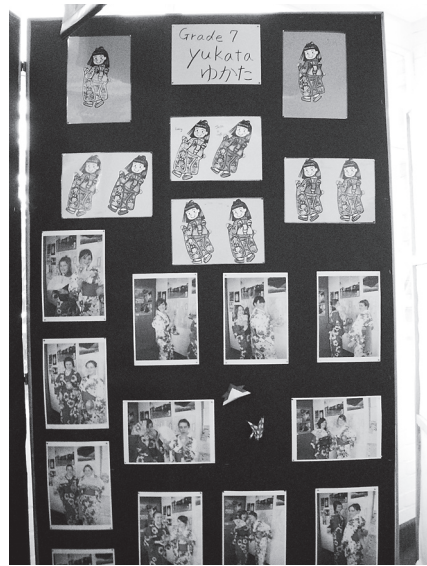
オグルビー高校は、1937年に創立されたオーストラリア、タスマニア州の公立女子校である。義務教育期間である前期中等教育にあたる、7年生から10年生の女子生徒が学んでいる。生徒数は1,200名に達しており、公立高校としてタスマニア州では最大の人数である。授業内容のレベルが高く、しつけにも重きをおいた伝統校である。私立校と違い入学試験はないが、面接を実施している。女子教育に誇りをもち、教育ビジョンとして「Educating Girls for the Ever Changing World」を掲げ、コンピュータや情報教育にも力をいれている。

タスマニア州の教育施策に基づき、カリキュラムは「英語」、「保健体育」、「英語以外の言語」、「数学」、「理科」、「社会と環境」、「芸術」、「技術」の学習領域を中心に構成されている。それぞれの学習領域は、小学校入学前の準備教育の段階から義務教育修了時の10年生まで、レベル1が準備教育相当、レベル2が小学校1・2年生相当というように、学年の幅を持たせてレベル分けを行い、到達目標が示されている。「英語」または「英語以外の言語」と「数学」の領域においては、成果をはかるために7年生と9年生を対象に全国共通テストを実施している。

オグルビー高校の教育は、「共に未来を作ろう」という理念に基づき、グローバルな学校「Globally Connected School」として学習の垣根をこえて教育力を高め、勇気と思いやりを兼ね備えた生徒を育てることを目標としている。学校のカリキュラムの中に、生徒たちが異文化について学習し、体験する機会を多く取り入れている。アジアを含めた多くの国の歴史、地理、文化、伝統、政治、経済について学習し、外国語の習得に熱心である。日本語、フランス語、中国語の授業を設置しており、特に日本語は選択科目でも生徒に人気がある。オグルビー高校の生徒は外国語学習プログラムの一環として、日本、中国、フランスに研修に行き、文化、伝統、習慣、料理、外国語について学び、異文化理解を深めている。

またグローバル化を推進する活動の一環として、生徒は支援活動を通して、バングラデシュの学校の教員の給与、教科書代、校舎の維持費を集めている。学年の取り組みとして8年生の生徒は、国際NGO組織であるワールド・ビジョンを通じて、インドのコミュニティや生徒の支援活動をし、10年生の生徒はフィリピンの孤児院でボランティア活動を行なった。2010年9月には、オグルビー高校の生徒20人がナミビアの学校で一週間ボランティア活動を行い、ティムズ校長が引率した。このように多文化的かつグローバルな教育が行われている。

〈異文化についての学習風景〉



オグルビー高校の生徒たちは、卒業後、日本の高校2年・3年に相当する進学準備課程である後期中等教育に進み、大学や専門学校で専攻する分野の基礎を勉強する。中等教育修了に際しては、州の教育修了資格（TCE, Tasmanian Certificate of Education）を取得するための試験を受験し、この結果と学業成績の結果に基づき、進学可能な大学が決定される。

Ⅲ. オグルビー高校との交流行事について

1. 目的の要点は以下の通りである。

(1) オグルビー高校は日本への語学研修の一環として、目白研心中学校・高等学校を訪問し、

交流を深める。

- (2) オグルビー高校の生徒は目白研心の生徒の家庭で、2泊3日のホームステイを行う。オーストラリア人の生徒が、同世代の日本人やその家族と衣食住を共にする生活を送ること
で、互いの国や言語・文化について理解を深めることができる。

2. 下記の日程で実施された。

- (1) オグルビー高校の語学研修期間は、3月26日（金）から4月13日（火）までの19日間
であり、大阪、京都、奈良、広島、姫路、飛騨高山、東京を訪れた。（資料1）オグルビー
高校の日本語クラスの生徒の中から希望者を対象に実施し、研修費用は約4500ドル（約34
万円）であった。
- (2) 目白研心での受け入れ期間は、4月8日（木）から4月10日（土）までの3日間とした。
ホームステイは目白研心の生徒の家庭のボランティア、ホストファミリーへの交通費、交
流行事費用は学園負担で実施した。

3. 交流プログラム概要は次の通りであった。

第1日目（4月8日 歓迎交流会）

1. オリエンテーション
2. ホストファミリー紹介、キャンパスツアー
3. 歓迎昼食会（中高カフェテリア）
 - ・吹奏楽部演奏
 - ・オグルビー高校合唱
4. チアリーダー部演技（体育館）
5. ホストファミリーと帰宅



〈目白研心 吹奏楽部 演奏〉



〈オグルビー高校 合唱〉

第2日目（4月9日 校外学習）

1. 来賓3名（ティムズ校長、国際交流担当モーガン夫妻）は、目白研心中学校・高等学校入学式出席
2. オグルビー高校生徒は、ホストシスターと登校
校外学習（江戸東京博物館、浅草）
3. 学校にて解散
ホストファミリーと過ごす



〈江戸東京博物館〉

第3日目（4月10日 異文化体験）

1. オグルビー高校生徒は、ホストシスターと登校
2. オリエンテーション
3. 「茶道体験」（表千家 新井先生）
4. 「手巻き寿司体験」
5. 交流行事終了



〈茶道体験〉



〈手巻き寿司体験〉

4. 参加者代表数は以下のようであった。

- ・オグルビー高校 教員 6 名、生徒 25 名
- ・目白研心中学校・高等学校 教職員 10 名、生徒 24 名（中学生 5 名、高校生 19 名）
- ・目白研心中学校・高等学校生徒会役員 6 名
- ・目白大学 学生 1 名、目白大学日本語教育インターン生 1 名

5. 準備は以下の手順で行った。

- (1) オグルビー高校からの受け入れ要請を受けて、校務運営委員会において、交流行事の日程、目的、意義について検討した。
- (2) 国際教育部で交流行事の原案を作成した。
- (3) PTA国際交流委員会、「MOMの会」（ホストファミリー同窓会）に協力を要請し、PTA運営委員会にて説明した。
- (4) ホストファミリー募集にあたり、全校生徒の家庭に「ホストファミリー募集のお知らせ」を配布した。女子生徒の受け入れなので、今回は目白研心の女子生徒の家庭に協力を依頼した。
- (5) ホストファミリーのリストを作成し、家族構成、食品・動物アレルギーに留意しながらマッチングを行った。
- (6) 目白研心のホストファミリーに受け入れ生徒のプロフィールを配付した。
- (7) 目白研心の生徒・保護者を対象にホストファミリー説明会を実施し、3 日間の日程と受け入れ生徒について説明をした。
- (8) 来賓、ホストファミリーに「歓迎昼食会のご案内」を送付した。
- (9) 国際教育部で「交流行事日程表詳細」を作成した。
- (10) 受け入れ準備を国際教育部と事務部で次の通りに行った。
 - ・ネームプレート、「歓迎昼食会」パンフレットを作成した。（資料 2）
 - ・記念品（学校案内パンフレット、目白大学文房具セット、目白研心ペン、シャープペンシル、マグネット）を準備した。
 - ・「江戸東京博物館」に入館料免除（目白研心生徒・引率教員、オグルビー高校教員）を申請し、引率者会議において詳細を検討した。

6. 生徒への指導を下記のように行った。

- (1) 事前指導
 - ・オグルビー高校のロー教諭（日本語担当）と連携を図り、両校生徒に交流行事の目的、意義、日程について説明した。
 - ・目白研心ホストファミリープロフィールを作成し、オグルビー高校のホストシスターへの自己紹介の手紙を送付した。

(2) 実施時の指導

- ・目白研心ホストファミリーの生徒には、交流行事の前日にオグルビー高校の生徒を受け入れるに当たっての留意点と3日間の日程の詳細について説明した。
- ・オグルビー高校の生徒には「オリエンテーション」にて、目白研心の校則とホストファミリーとの生活での注意事項の説明をした。
- ・今までに培った日本語力・英語力を使い、交流行事やホームステイにおいてコミュニケーションが積極的にとれるように両校生徒の積極性を促した。
- ・安全面、健康管理について細心の注意を払うように指導した。

(3) 実施後の指導

- ・交流行事の成果を計るために両校の生徒へのアンケートを実施した。
- ・交流行事で身につけた知識を学習や生活の中で活かせるように指導した。
- ・オグルビー高校の生徒を受け入れたホストファミリーへ「お礼」の手紙を送付した。
- ・文化祭における国際交流の発表の一貫として、目白研心高等学校クラブ（国際文化部）とPTA国際交流委員会がオグルビー高校との交流行事について展示発表を行った。



〈文化祭展示〉

Ⅳ. 交流行事の成果

(1) 語学力向上、異文化理解、交流行事の意義について

交流行事に参加したオグルビー高校と目白研心中学校・高等学校の生徒を対象に語学、異文化理解、ホストファミリーとの生活についてアンケート調査を実施した。オグルビー高校の生徒には英語、目白研心中学校・高等学校の生徒には日本語で、同じ項目で調査を行った。その結果、語学習得、異文化理解、交流行事への取り組みにおいて、大きな成果が見られた。

具体的には、「交流行事に関するアンケート調査—交流行事に参加して」項目1. 語学力の向

上（肯定的評価：オグルビー高校生徒96%、目白研心生徒92%）、項目2. 異文化理解の向上（肯定的評価：オグルビー高校生徒68%、目白研心生徒8%）、項目3. 文化を持った人々に対する理解の向上は（肯定的評価：オグルビー高校生徒92%目白研心生徒75%）となっている。語学力の向上について、オグルビー高校の生徒は「ホストファミリーとの会話を通して日本語の単語を覚え自信がついた」、「生活の中で日本語を聞いたり、読んだりしたので上達が見られた」と回答した。目白研心の生徒は「自分の知っている単語をつなげて会話をしたら、意外と伝わっていて楽しくなりたくさん話すことができた」、「英語を話すことに自信がついた」、「コミュニケーションを取ったことで興味がわき、もっと英語を勉強しなければならないと思った」ことを挙げた。異文化理解の向上に関して、オグルビー高校の生徒は、「ホストファミリーとの生活を通して、日本の家族の生活様式について知ることができ、日本への理解が深まった」、「日本人は礼儀正しく、決められた規則を守り、尊敬できる国民だと思った」、「家庭での家族との過ごし方はあまりオーストラリアと変わらないと思った」、「駅や市内に英語のサインが多く分かりやすかった」、「日本は安全で町がきれいであり、安心して生活ができる」と回答した。目白研心の生徒は、「オグルビー高校の生徒が規則をよく守り礼儀正しく、国を超えた交流ができた」、「一緒に生活することにより、オーストラリア人の生活習慣について知ることができ、あまり日本人と変わらないと思った」ことを挙げた。

異文化理解というと、共通性よりも文化の差異を理解することが強調される傾向がある。差異を理解し認識することは重要ではあるが、相違の中に見られる、またはともに存在する共通点や類似点を両校の生徒たちは見出している。異文化コミュニケーションは相互作用であり、有益なものとするには、他者や多文化だけでなく、自己や自文化についての正しい認識が必要である。今回の交流は、両校の生徒に共通項を見出す機会を与えたことも有用であったと思われる。

項目5. 交流行事のプログラムの意義については、オグルビー高校の生徒の88%、目白研心生徒の96%が肯定的評価をした。受け入れ期間が3日間であったので、楽しい思い出が印象に残ったことが考えられる。プログラムの内容について、オグルビー高校の生徒の44%が「とても満足した」と回答した。受け入れホストファミリーの保護者からは、「1日目はコミュニケーションを取るのに苦労したが、2日目からは互いに歩みより楽しく過ごすことができた」、「ホストファミリーを体験したことで、文化の違いに気づき、とても勉強になった」、「受け入れをしたことにより、家族全員で話す機会が増え、よい体験になった」ことが挙げられた。期待した内容が達成された要因としては、両校の間に毎年交流が活発に行われていること、双方の側が成功への強い意欲を持っていたこと、友情が築かれたこと、学園本部・教職員や保護者の積極的な協力が得られたことが挙げられる。さらに両校の生徒たちが、日本人の家族とともに3日間過ごし、互いの生活の中から互いの言語や文化についての相互理解を深めたことは大きな成果であったと言える。

(2) ホームステイについて

オグルビー高校の生徒の受け入れにあたっては、目白研心中学校・高等学校の女子生徒の家庭を対象に募集した。在校生より25名（目白大学1名を含む）の申し込みがあり、オグルビー高校の生徒を一人ずつ依頼することにした。家庭の事情で前日に受け入れができなくなったホストファミリーがあり、オグルビー高校に生徒が留学したことがある家庭に急遽2名の受け入れを依頼した。目白大学の学生は外国語学部日本語学科4年生で、卒業後はオグルビー高校での「日本語教育インターン」を希望している。

ホストファミリーとのマッチングにあたり注意したことは、動物・食品アレルギー、ベジタリアンなどの食事制限のあるオグルビー高校の生徒への配慮である。食事制限がある生徒の受け入れは、食べられない食品のリストを作成し、PTA国際交流委員または留学経験者の家庭に要請した。夜間・緊急の場合はホストファミリーから目白研心事務局・警備室に連絡し、筆者が対応することとした。浅草での校外学習からの帰宅時にオグルビー高校生徒1名が体調を崩し、オグルビー高校の教員の宿泊するホテルの部屋で休憩を取らせ、ホストファミリーに迎えにきてもらった。それ以外は受け入れ生徒に健康面の問題はなかった。

項目4. 受け入れ期間についてはホームステイの3日間という日程で、アンケートの結果から両校の生徒にとって適切であったといえる。オグルビー高校の生徒の語学研修が目白研心の春休み中であり、ホームステイは語学研修の最後、また家庭への負担を考慮し3日間と決めた。目白研心の保護者からは、「2泊3日なので気軽に受け入れることができたが、いろいろな経験をさせてあげたいと思っても時間がなく実行できずに残念であった」という声もあった。オグルビー高校の生徒からは、「日程の関係で無理ではあったが、研修の最後で疲れていたの、日本到着後すぐにホームステイが実施できればよかった」、「ホストシスターと一緒に学校の授業を経験してみたかった」という声があった。3日間という短い期間ではあったが、同年代の生徒の家庭でホームステイを行うことにより、「教科書や映画で見たのとは違う実体験ができた」ことは成果の一つである。

交流行事に関するアンケート調査

(成果向上結果)

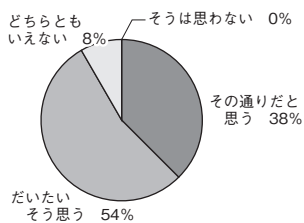
実施日：2010年4月10日（土）

①対象：目白研心生徒23名、目白大学日本語学科学学生1名

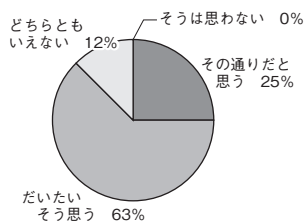
(単位は人数)

交流行事に参加して	その通りだと思う	だいたいそう思う	どちらともいえない	そうは思わない
1. 自身の語学力に変化があった	9	13	2	0
2. 異文化に対する考え方が変わった	6	15	3	0
3. 異文化を持った人たちに対する理解が変わった	7	11	5	1
4. オグルビー高校生徒の受け入れ期間は適切であった	6	13	5	0
5. 交流行事は有意義であったと思う	17	5	2	0

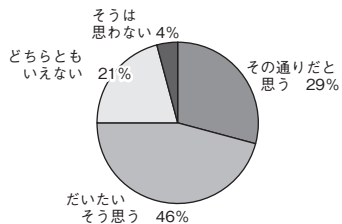
1. 自身の語学力に変化があった



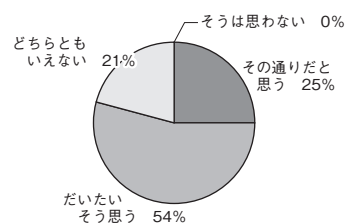
2. 異文化に対する考え方が変わった



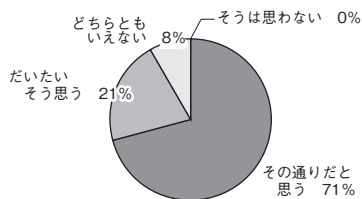
3. 異文化を持った人たちに対する理解が変わった



4. オグルビー高校生徒の受け入れ期間は適切であった



5. 交流行事は有意義であったと思う

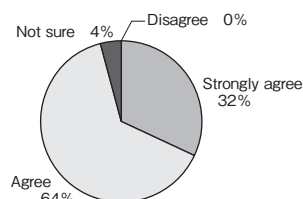


②対象：オグルビー高校生徒25名

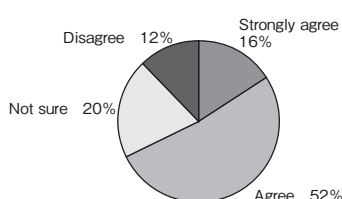
(numbers indicate people)

By taking part in this program	Strongly agree	Agree	Not sure	Disagree
1. My Japanese skills improved	8	16	1	0
2. My impression of Japanese culture changed	4	13	5	3
3. My awareness of Japanese people increased	21	2	2	0
4. The time I spent with my host family was sufficient	6	9	1	9
5. I gained a lot through this experience	18	4	3	0

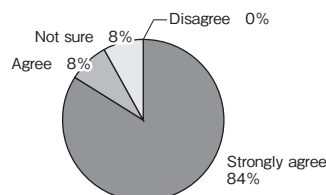
1. My Japanese skills improved



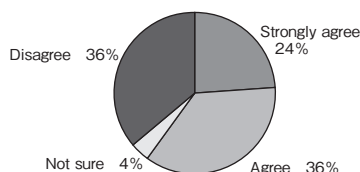
2. My impression of Japanese culture changed



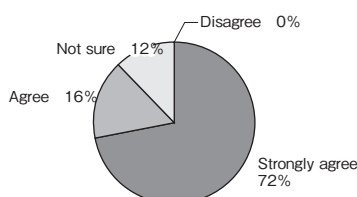
3. My awareness of Japanese people increased



4. The time I spent with my host family was sufficient



5. I gained a lot through this experience



(3) まとめ

どんな国でもその国についてのイメージを最終的に決定づけるのは、私たち個人の体験である。私たちが外国や外国人についてどのようなイメージを持っているか、逆に日本や日本人について、どのようなイメージを持たれているのかについて、積極的に意見交換し議論することが互いを理解するには重要である。交流行事に参加したことがきっかけとなり、さらに互いの国や文化について知りたいと短期留学を決定した生徒が両校に2名ずついる。またメールのやり取りを続けている生徒も多い。今後は、クラブ同士の交流にも発展する可能性がある。

さらに、今回の交流行事をきっかけに目白研心中学校・高等学校と目白大学との連携を図ることができた。2010年4月より、目白大学外国語学部日本語学科及び大学院言語文化研究科日

本語・日本語教育専攻の修了生を対象に、英語圏での日本語教育インターンシップ制度がスタートした。派遣先は目白研心高等学校と姉妹校提携を結んでいるオグルビー高校を含むオーストラリア及びニュージーランドの4校である。目白大学日本語学科の学生と、今年度オグルビー高校に派遣された目白大学日本語教育インターン生は、目白研心での行事に参加することにより、オグルビー高校の教職員や日本語クラスの生徒たちと交流を深めることができた。オグルビー高校の目白大学日本語教育インターン生は、教員のアシスタントとして、日本語クラスの生徒や留学生（目白研心からの交換留学生を含む）の指導を担当している。このような幅広い人的交流により、さらに両校の交流が深まることが期待される。

（４） 今後の課題

今回の交流行事は、オグルビー高校が女子校であるために、目白研心の女子生徒の家庭に受け入れを依頼した。目白研心中学校・高等学校は2009年度より共学化した^{註3)}が、今回の交流行事に参加したのは、生徒会役員や吹奏楽部の男子生徒以外は主に女子生徒であった。共学の姉妹校との交流行事としては、1995年にカナダのコリンウッドスクールの合唱団、1998年にニュージーランドのタカプナグラマースクールの語学研修生徒を受け入れたが、当時は女子校であったために、男子生徒の受け入れは他校に依頼した。男子生徒にも姉妹校との交流行事に参加する機会を増やすために、今後はニュージーランド、カナダの共学校・男子校とスポーツや音楽を通じた交流を前向きに検討していきたい。

V. おわりに

私たちは、現在、国際化した社会で生活をしており、異文化に生きる人々と交流する機会は、増加すると同時に多様化している。異文化との接触は、自ら望んで海外に出て行くものだけに与えられるのではなく、誰もが関わることができる現代的な活動である。しかし、いくら身近になっているとはいえ、文化を超えた交流は容易ではない。学校現場では、平和と相互理解を推進し、よりよい世界を築くために、異なる文化と接し、理解しようとする生徒の育成が求められている。日本や日本人に対するイメージは、政治や教育以外の思いがけないきっかけから形成されることもある。異文化に触れる機会がますます多くなっている現代社会においては、そのようなイメージは国際問題に対する政府の対応が作りだすばかりではなく、私たち一人ひとりの異文化体験のよることが大きい。

文部科学省の「高等学校等における国際交流等の状況について」の調査では、2008年度に3ヶ月以上の海外留学をした高校生は3,190人で、前回調査の2006年度から19%減少している^{註3)}。ピークの1992年度から見ると29%減少しており、文部科学省は「若者が海外に出ない内向き志向が強まっている上、不況の影響で費用がかかる留学を避けたのではないか」と分析している^{註4)}。またベネッセ教育ニュースは、「世界同時不況が始まった2008年9月以前からの高校生の海外留学や語学研修減少は、保護者の経済状況悪化だけでは説明できない。海外に目を向け

羽ばたくという雰囲気が社会からなくなりつつあるのではないかと指摘している^{註5)}。しかし中国や韓国では欧米諸国への留学希望者が増え、その結果日本人留学生の割合が下がっている。一方で海外からの教育旅行を受け入れた高等学校は延べ1,429校、訪問者数は33,615人で前回調査より10.7%増加した。このような現状を踏まえて、研修を目的として来日する海外生徒との交流を積極的に図ることも生徒の知識、言語、および文化に対する相互交流を行うことにつながる。

現代社会では、インターネットの普及により、世界中の情報が瞬時にもたらされている。日本が国際的な競争力をつけていくためには、グローバル化した視点を持つ教育が中等教育においても求められている。具体的には、主体的に物事を考え、文化的な違いがあっても相手の立場にたって考えることができる人材の育成である。そのためには、生徒が異文化理解を自ら体験する機会を増やすことが重要であり、本稿で提言しているような海外姉妹校との交流を通じたプログラムが有効だと考える。

【註】

- 1) 学校法人目白学園中期計画「目白 Quality Education の進化—中学・高等学校部門」2010年5月22日
- 2) 文部科学省初等中等教育局国際教育課「平成20年度高等学校等における国際交流の状況について」文部科学省 2009年
- 3) 文部科学省初等中等教育局国際教育課「平成20年度高等学校等における国際交流の状況について」文部科学省 2009年
- 4) 千葉日報「高校生の外国留学19%減 内向き志向、不況も影響」2010年1月28日
- 5) ベネッセ教育ニュース「なぜ減った？ 高校生の海外留学」2010年3月8日

【参考文献】

- ・青木保著『異文化理解』岩波新書 岩波書店 2007年
- ・海外子女教育振興財団「海外子女教育 オセアニアの学校生活 2009 No.439」2009年9月
- ・財団法人自治体国際化協会（シドニー事務所）「オーストラリア、ニュージーランドにおける 国際交流 Clair Report 215」（財）自治体国際化協会 2001年
- ・志村隆編著『世界の中学生—オーストラリアの中学生』学習研究社 2004年
- ・竹内裕子・石川卓編著『多文化と自文化—国際コミュニケーションの時代』森話社 2005年
- ・中嶋嶺雄『全球（グローバル）教育論』西村書店 2010年
- ・文部科学省初等中等教育局国際教育課「平成20年度高等学校等における国際交流の状況について」文部科学省 2009年

(資料1) オグルビー高校語学研修 旅程表

No.	DATE	CITY	TIME	TRANSPORT	DETAILS	MEAL
	2010					
1	26 March (Fri)	HOBART	19 : 00	DJ1321	Leave for Melbourne by Virgin Blue	OB
		MELBOURNE	12 : 00	TG466/622	Leave for Osaka by Thai Airlines	
2	27 March (Sat)	OSAKA		Coach	Transfer to Kyoto	B
		KYOTO			Enjoy cherry blossoms in Arashiyama, Lunch	L
			18 : 00		Dinner at Utano Youth Hostel	D
3	28 March (Sun)	KYOTO	7 : 00		Breakfast at Utano Youth Hostel	B
				JR	Visit Kiyomizu Dera, Gion, Lunch	L
			18 : 00		Dinner at Utano Youth Hostel	D
4	29 March (Mon)	KYOTO	7 : 00		Breakfast at Utano Youth Hostel	B
				JR	Visit Kinkakuji, Nishijin Textile Factory, Lunch	L
			18 : 00		Dinner at Utano Youth Hostel	D
5	30 March (Tue)	KYOTO	7 : 00		Breakfast at Utano Youth Hostel	B
				JR	Transfer to Hiroshima	
		HIROSHIMA			Visit Peace Museum, Lunch	L
		KYOTO		JR	Transfer back to Kyoto	
			18 : 00		Dinner at Utano Youth Hostel	D
6	31 March (Wed)	KYOTO			Breakfast at Utano Youth Hostel	B
				JR	Transfer to Himeji, Lunch	L
		HIMEJI		JR	Transfer back to Kyoto for shopping	
		KYOTO	18 : 00		Dinner at Utano Youth Hostel	D
7	1 April (Thu)	KYOTO	7 : 00		Breakfast at Utano Youth Hostel	B
				JR	Transfer to Nara	
		NARA			Visit Big Buddha, Nara Park, Lunch	L
		KYOTO	18 : 00	JR	Transfer back to Kyoto, Dinner	D
8	2 April (Fri)	KYOTO	7 : 00		Breakfast at Utano Youth Hostel	B
				JR	Transfer to Takayama	
		TAKAYAMA			Sightseeing in Takayama, Lunch	L
					Dinner at Tenshoji Youth Hostel	D
9	3 April (Sat)	TAKAYAMA	7 : 00		Breakfast at Tenshoji Youth Hostel	B
				JR	Visit traditional Ninja House, Lunch	L
					Dinner at Tenshoji Youth Hostel	D
10	4 April (Sun)	TAKAYAMA	7 : 00		Breakfast at Tenshoji Youth Hostel	B
				JR	Visit Hida no Sato, Lunch	L
					Dinner at Tenshoji Youth Hostel	D
11	5 April (Mon)	TAKAYAMA	7 : 00		Breakfast at Tenshoji Youth Hostel	B
				JR	Visit Hida Furukawa, Lunch	L
			18 : 00		Dinner at Tenshoji Youth Hostel	D

目白研心中学校・高等学校における海外姉妹校交流プログラム

12	6 April (Tue)	TAKAYAMA			Breakfast at Tenshoji Youth Hostel	B
				JR	Transfer to Tokyo, Lunch	L
		TOKYO		JR	Visit Harajuku, Shinjuku, Dinner	D
13	7 April (Wed)	TOKYO			Breakfast at Hotel Route Inn	B
				JR	Transfer to Tokyo Disneyland, Lunch	L
					Dinner at Hotel Route Inn	D
14	8 April (Thu)	TOKYO			Breakfast at Hotel Route Inn	B
			10 : 00	Metro	Transfer to Mejiro Kenshin	
					Arrive at Mejiro Kenshin, Meet host family	
			12 : 00		Welcome Ceremony	L
			15 : 00		Leave with host family, Dinner	D
15	9 April (Fri)	TOKYO			Breakfast at host family	B
			8 : 30		Arrive at Mejiro Kenshin	
			9 : 00	Metro	Leave for Asakusa	
			10 : 00		Visit Edo Tokyo Museum	
			12 : 00		Sightseeing in Asakusa, Lunch	L
			15 : 00	Metro	Transfer back to school	
			16 : 00		Leave with host family, Dinner	D
16	10 April (Sat)	TOKYO			Breakfast at host family	B
			8 : 30		Arrive at Mejiro Kenshin	
			9 : 00		Orientation, Tea Ceremony	
			11 : 00		Make Your Own Sushi Party	L
			14 : 00		Farewell	
				Metro	Transfer to Hotel Route Inn, Dinner	D
17	11 April (Sun)	TOKYO	7 : 00		Breakfast at Hotel Route Inn	B
			9 : 00	Metro/JR	Transfer to Odaiba, Sightseeing, Lunch	L
			18 : 00		Dinner at Hotel Route Inn	D
18	12 April (Mon)	TOKYO			Breakfast at Hotel Route Inn	B
				Coach	Transfer to Narita Airport	
			16 : 55	TG465	Leave for Melbourne by Thai Airlines	OB
19	13 April (Tue)	MELBOURNE	13 : 00	DJ1332	Leave for Hobart by Virgin Blue	
		HOBART	20 : 00		Arrive Hobart	

B = Breakfast, L = Lunch, D = Dinner, OB = On Board,
JR= 14 day Japan Railway Pass

(資料2) 歓迎昼食会プログラム

I **Welcome Luncheon** 交流会 (12:30～) 中高カフェテリア

- | | | |
|----|----------------------------|---|
| 1 | Opening Remarks
開会のことば | Ms. Haruko Morimoto
International Education Dept.
Mejiro Kenshin |
| 2 | Welcome Speech
主催者挨拶 | Mr. Koki Sato
President, CEO, Mejiro Gakuen |
| 3 | Guest Speech
来賓挨拶 | Ms. Judith Timbs
Principal, Ogilvie High School
Ms. Jenny Morgan, International
Education, Ogilvie High School |
| 4 | Welcome Speech
歓迎のことば | Mr. Hideo Nonaka
Principal, Mejiro Kenshin |
| 5 | Student Speech
生徒代表挨拶 | Ms. Satomi Okada
President, Student Council
Ms. Eliza Archer, Student
Ogilvie High School |
| 6 | Toast
乾杯、会食、懇談 | Mr. Masami Saito
Vice Principal, Mejiro Kenshin |
| 7 | Performance
演技 | Mejiro Kenshin Brassband Club |
| 8 | Song
歌 | "We are Australian"
Ogilvie High School Students |
| 9 | Gift Presentation
記念品贈呈 | Mejiro Kenshin to Ogilvie High School |
| 10 | School Song
校歌斉唱 | Mejiro Kenshin Brassband Club |
| 11 | Closing Remarks
閉会のことば | Ms. Haruko Morimoto
International Education Dept.
Mejiro Kenshin |

II **Cheerleading Performance in School Gym** 交流会 (14:30～) 体育館

- | | |
|---|--|
| 1 | Welcome Remarks
歓迎のことば |
| 2 | Cheerleading Performance by Polaris
チアリーディング部演技 |
| 3 | Closing Remarks
閉会のことば |

(資料3) 広報誌 Mejiro Exchange Volume 41 (目白研心中学校・高等学校 発行)



**MEJIRO
GAKUEN**

VOL.41

Mejiro Exchange

Mejiro University (Undergraduate, Postgraduate)
Mejiro University College
Mejiro Kenshin Junior and Senior High Schools

Mejiro Gakuen
4-31-1 Nakaochiai Shinjuku-ku Tokyo 161-8539
Tel. 03-5996-3131 <http://www.mejiro.ac.jp>

JUNE 2010

Ogilvie High School Principal's Opening Ceremony Speech at Mejiro Kenshin

Thank you very much for inviting members of the Ogilvie School community to be here today to join with you in the opening of the 2010 school year. The beginning of a school year is always exciting. We have much to look forward to as the new school year begins. We are very excited and honoured to be here and to receive your wonderful hospitality.

Since 1995 Mejiro and Ogilvie have shared a special relationship through student exchanges. A total of 28 students have participated over this time. This year, once again, we will welcome Mejiro students and our students will come to Mejiro. We have also shared the performances of bands, choirs and cheerleaders. This year



Welcome words from Principal Timbs

we are especially pleased to welcome a Language Assistant Teacher from Mejiro University in April. Right now, three of our teachers and 25 of our students are being hosted in your school and with your families.

Our school has a vision which is Creating Futures Together. In order to achieve that vision, we are on a mission to create a globally connected school which makes the experience of education excellent for all, to challenge the boundaries of learning and to develop courageous, compassionate and caring learners.

Today's visit to Mejiro Kenshin is a wonderful example of one way of our school enacting our mission. At Ogilvie we believe we need to be a globally connected school. There are several ways for us to achieve this and to develop cross cultural awareness for our students. Firstly - we provide an opportunity in the curriculum for our students to learn about and experience other cultures. Students in our school learn about the history and geography, the cultural traditions and about the politics and economies of many countries.

As part of our foreign language programs, our students are given the wonderful opportunity to travel to the country - so we have trips to Japan, China and France. These trips allow our students to experience first-hand the country, its people, culture, customs, and cuisine and to practice their language skills. Our students learning the Japanese language are those presently here at

Mejiro.

In our curriculum we also study issues of social justice. We believe we need to give our students an understanding of current world issues to help them make meaning of many complex situations such as pollution, global warming and aging populations. So, in summary, the curriculum and its content is a powerful way to promote critical awareness of global concerns, cultural diversity and to promote the understanding of others' values.

Secondly, we support cultural understanding by encouraging our students to participate in student exchange programs as well as our sister school relationship with Mejiro.

We are now living in an international community. Our school strives to give our students the opportunity to understand the differences in the many cultures, to appreciate them and to embrace them to make the world a better place. Because no matter what colour our skin or what country we are born in, we are all citizens of the world. That's why it is so special to be here today at your school and to be with your President, Mr. Sato and your teachers and to meet you all.

We wish the new students a successful and happy time in your new school.

Judith Timbs
Principal, Ogilvie High School

The Japan Trip by Ogilvie High School, Australia

During the beautiful Japanese Cherry Blossom Season of April, 25 Ogilvie High School Japanese students and three teachers were lucky enough to come to Japan for a 15 day cultural experience. We spent many lovely days viewing famous Japanese sights such as Kinkakuji, Kiyomizu Dera, Himeji Jo and Nara. The cherry blossoms were in full bloom in Kyoto and we felt very lucky to be in Japan at this beautiful time.

We then journeyed to Takayama, where we spent time enjoying a slower pace of life and learning about the more traditional aspects of Japanese life at Shirakawago and Ainokura.

The last part of our journey was busy Tokyo. We were very grateful to be hosted by Mejiro Kenshin after a long period of absence. To commemorate this special re-kindling of our sister school relationship our Principal, Judith Timbs, also joined us.

Meeting their host sisters and experiencing a Japanese school was the highlight for most of our girls on the trip. Everyone was very nervous about communicating in Japanese; however, as always, wonderful relationships and friendships were formed despite the language barriers.

We wish to sincerely thank the staff, students, host families and everyone else who went to such trouble to make our stay so memorable at such a busy time of

year. We are extremely grateful for this wonderful opportunity to be a part of your lives for even a short few days. Our students are still talking about the wonderful performance by your cheerleaders and the opportunity to experience a tea ceremony in such authentic settings. We hope that we will be able to return the favour in the near future and host Mejiro students in Tasmania.

Claire Rowe - Japanese Teacher

A few comments from Ogilvie High School students:

"I loved home stay! My family was really nice and it was a great experience to see how they lived and what their daily schedule was like." - Victoria
"It's so amazing to be able to stay with a Japanese family, it helps you to see and understand the culture better." - Eliza



Ogilvie and Mejiro Kenshin students and teachers in Asakusa, Tokyo

Ogilvie High School Comes to Mejiro Kenshin

On April 8th, students and teachers from Ogilvie High School came to Mejiro Kenshin for three days. It was a very short time, but it was wonderful.

On the first day we gave a welcome party. We were nervous about meeting our Ogilvie sisters, but we soon opened up to each other and became good friends. On the second day we went to Asakusa and Edo Tokyo Museum. In Asakusa we were surprised by how big the temple was. And at the Edo Tokyo Museum we got to learn about traditional culture. On the third day we participated in a tea ceremony and had a sushi party. The sushi was very delicious.

Their stay with us was very short, but we were very sad when they had to go back to Australia. We hope that we can meet our Ogilvie sisters again someday.

Momoko Kasuya
Mejiro Kenshin student
and homestay volunteer

